報　告　4

マニラ首都圏のイスラム教徒

宮　本　　勝
（国立民族学博物館第２研究部）

はじめに
1　ムスリム・コミュニティ成立の歴史的背景
2　バンダラインェッドの構成と変化
3　ディスカッション

はじめに

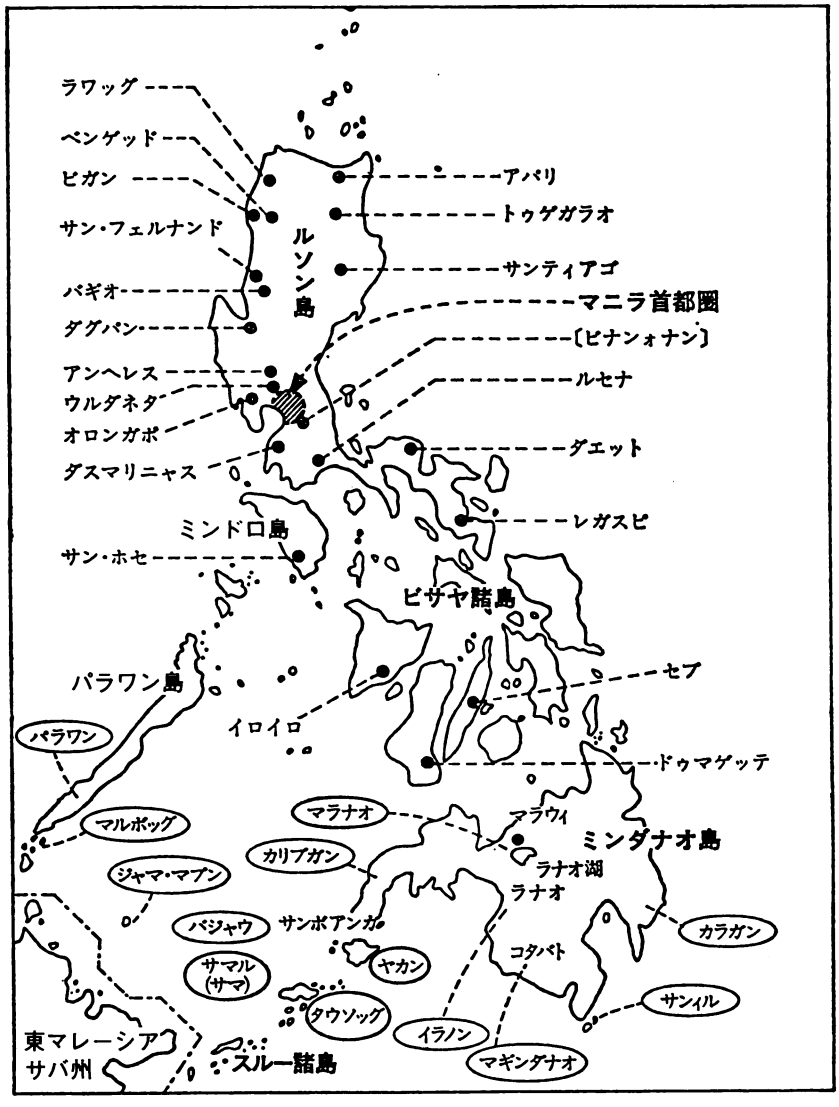
今日フィリピンには、約300万人のイスラム教徒（ムスリム）が住んでいます。フィリピンの全人口の約５％にすぎませんが、隣りのイスラム教国マレーシアのムスリム人口の四割に相当するのですから、300万という数は決して少ないとはいえません。フィリピンのムスリムは、13のエスニック・グループ（種族）に分けられ、主に南部のミンダナオ島、スルー諸島に分布しています（資料１）。

フィリピン南部のムスリムに関する研究はかなりありますが、ほかの地域のフィリピン・ムスリムに関しては、一般のフィリピン人の間でも、その存在についてさえ余り知られていません。ルソン島、ビサヤ諸島、ミンドロ島に少なくとも27のムスリム・コミュニティが点在しています（資料１）。いずれもミンダナオ・スルー出身者からなるコミュニティで、大規模なものはマニラ首都圏に集中しています。

私がマニラ首都圏のイスラム教徒に関する研究を手がけたのは、ごく最近のことです。この研究のもととなる現地調査のねらいは、何よりもまず、マニラのムスリムの実態の把握にありました。今日マニラ首都圏に住んでいるムスリムがなぜ自分たちの故郷を離れ、どのような経過をたどってマニラにコミュニティを形成し、それらのコミュニティはどのような仕組みで構成されているのか、そして彼らは異った文化的セッティングの中でどのような適応を示しているのか、といった基礎的な問題について調べてみることが、その調査の目的でした。

ムスリムのマニラ移住の背景として、商業活動、イスラムの布教、フィリピン政府の少数民族政策などの要因が考えられますが、1970年代のクリスチャン・フィリピノとムスリム間の戦闘による治安の悪化・経済的貧困とその背景にあるアメリカ統治期以来のミンダナオ・スルー開拓移民政策を抜きにしてはその現象を理解することはできません。この報告では、まず、こういった問題を念頭に置きながら、ムスリムのマニラ移住とコミュニティ形成の過程を概観してみたいと思います。

［資料１］　フィリピン南部のムスリム諸種族の分布とムスリム移住者のコミュニティ所在地



1　ムスリム・コミュニティ成立の歴史的背景

フィリピン南部のムスリム・コミュニティは出自・タイトル・テリトリー体系、それにイスラム法を取り入れた法体系を枠組として構成されています。それに対して、マニラのムスリム・コミュニティでは、居住者の大半が親族関係になく、スルタン（sultan）やダトゥ（datu）などのタイトル保有は皆無です。出身地も多様で、しかもカトリック教徒が大半を占める都市というセッティングの中で生活しており、フィリピン南部のムスリムの伝統的な社会構成とは性格を異にしています。

私がマニラで調査を試みた1986年９月は、アキノ大統領とモロ民族解放戦線のミスアリ議

長との会見が成立した時期でもあり、住民からムスリム問題をめぐる意見を聴くことができました。この調査を手掛りとして、フィリピンのムスリム問題についても考えてみたいと思っています。

フィリピン諸島民にイスラムが初めて布教された時期ははっきりとわかっていませんが、歴史学者の研究によると、15世紀半ばにホロ島内陸部、ミンダナオ島南西部に普及し、16世紀にミンドロ島やルソン島に伝えられた、ということです。スペイン軍に征服された1571年以前のマニラは、ブルネイ出身のラージャ＝マタンダやその甥のラージャ＝スライマンに統治されていました。後者はブルネイのスルタンの娘と結婚しており、スペイン軍に最後まで抵抗した指導者として知られています。

8世紀初頭から15世紀半ばまで北アフリカのイスラム教徒（スペイン語でいう「モロ」）から政治的侵略を受けるという歴史的経験を持つスペインは、フィリピン諸島民のスペイン化＝キリスト教化による植民地政策を開始し、フィリピン南部では軍事手段によって「モロ」の文化的・政治的統一＝同化政策を企てました。結局スペインは、ムスリム地域をほとんど支配できずに、1898年にフィリピンの統治権をアメリカに移しました。アメリカ当局は、ムスリム地域を将来独立が約束された国家の一部としてみなし、フィリピン諸島民の「文明化」と発展、信仰の自由等を強調する政策を掲げていたものの、スペインの「モロ」同化政策を継承し、強力な軍隊を送り込んでこの地域を占領下におさめました。

スペイン統治期の初期にムスリムはマニラから姿を消してしまいましたが、アメリカ統治期にはいると、フィリピン南部のムスリムの指導者たちがマニラに招かれ、若者たちが奨学生としてマニラで学校教育を受け、徐々にムスリムの人口が増加してきます。1926年にはマニラ在住のムスリムによって「マニラ・ムスリム協会」（Manila Muslim Association）という財団が組織されるに至っています。1946年にフィリピンは共和国として独立しましたが、ミンダナオ・スルー地域では貧因、失業等の社会不安が深刻になってきました。それに伴い、ムスリムはルソン島各地に移住を開始し、マニラにはムスリム商人が定住し始めました。1950年代には、現在マニラ動物園が位置するコルタ・ビタルテに、約40家族のムスリムが住んでおり、そのほか、トンド、ディビソリア、サン・アンドレス・ブキッド、サンパロックなどにもかなりの数のムスリムの商人や学生が住んでいたようです。

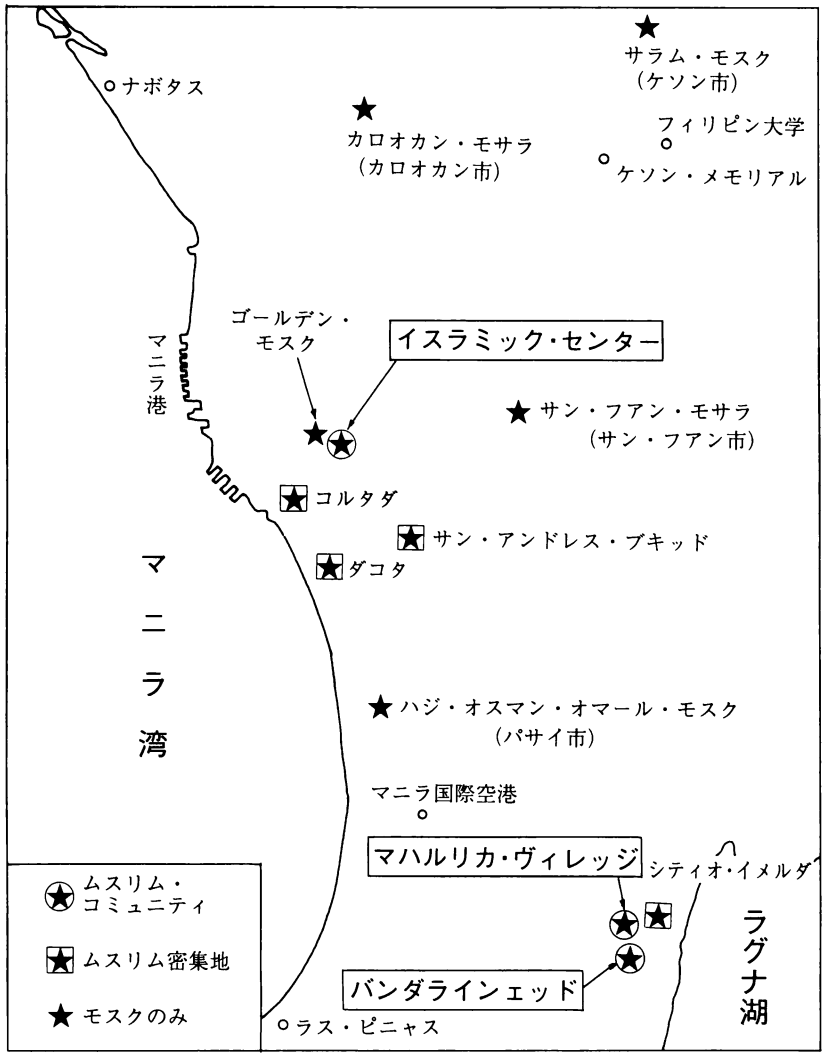
戦前のマニラ・ムスリム協会は戦後「フィリピン・ムスリム協会」（Philippine Muslim Association）として復活し、サンボアンガ在住のイスラム教指導者イマム＝ムハマッド＝クシンがこの協会の副会長に任命され、マニラに招かれました。イマム＝クシンの活躍により、それから9年後にマニラにイスラミック・センターとムスリム・ヴィレッジという二つのムスリム・コミュニティが誕生します。

今日マニラ首都圏には、ムスリムだけから成る大規模なコミュニティが三カ所に、そして多数のムスリムの密集地が四カ所に見られ、さらに、多くのムスリムが各地に分散しています。マニラのムスリム人口は十万を超えると推定され、大小合わせて12のモスクがあります（資料2）。

アメリカ統治期の1918年当時はムスリムがミンダナオ・スルー地域の人口の約五割を占めていました。ところが、今日では約二割にすぎません。このムスリム人口比の低下は、アメリカ統治期に始まった他の島々のクリスチャン・フィリピノの開拓移民政策によるものです。

アメリカ当局およびその後のコモンウェルス政府はミンダナオ・スルー地域にクリスチャ

［資料２］　マニラ首都圏のムスリム・コミュニティとムスリム密集地



ン・フィリピノの開拓民を多数入植させました。戦後のフィリピン政府もミンダナオ入植政策を推進したのです。よその島々からやってきたクリスチャンに土地を侵されたムスリムにとって、それは中央政府からの重圧以外の何ものでもありませんでした。

さて、イマム＝クシンはコルタ・ビタルテに移りましたが、政府は、そこに動物園をつくる計画を立て、住民に退去を命じたのです。結局彼らは、近くのダコタの一角を仮りの居住地とすることにしました。イマム＝クシンは、この経験を通じて、ムスリムが安心して住める場所の必要性に直面しました。

一方、フィリピン・ムスリム協会は、1964年７月にキアッポ地区の土地1.6ヘクタールを購入しました。そこにモスクと宿泊所が建設され、「イスラミック・センター」(Islamic Center)

が誕生しました。当初は、このセンターの宿泊所は主にムスリムの学生が利用しましたが、ミンダナオの政情が悪化した1969年には約1,500名のムスリム難民の収容所となったのです。その後、難民の移住が急増し、今日イスラミック・センターは人口25,000を超える一大コミュニティとなっています。

イスラミック・センターの土地購入後、イマム＝クシンは約20家族のムスリムを率いて、タギッグに移り、家屋を建てました。そこはフィリピン政府軍の軍用地フォート・ボニファシオの一部で、マニラ中心部より南東約15キロメートルのところにあります。

イマム＝クシンがタギッグを選んだ背景には、マカパガル大統領の声明があります。マカパガル大統領は、1965年５月に土地のない貧民に軍用地を提供するという旨の声明文を発表しました。イマム＝クシンは早速コミュニティづくりの許可を求める嘆願書を大統領府に提出しましたが、受理されませんでした。マカパガルの声明は、翌年の大統領選挙のための宣伝に過ぎなかったのです。そこでイマム＝クシンの一行は、軍用地での不法居住を決意したのでした。

彼らは、農業を営むために15ヘクタールの土地を開墾し、その一部に墓地をつくりました。モスクとマドラサ（アラビア語とコラーンの学校）を建て、念願のムスリム・コミュニティが成立したのです。イマム＝クシンは、このコミュニティを「ムスリム・ヴィレッジ」(Muslim Village）と名づけました。

マカパガルは選挙戦に敗れ、フィリピンはマルコス体制の時代にはいります。コレヒドール島で東マレーシア・サバ州襲撃のための秘密軍事訓練を政府軍より受けていたと一般にいわれるムスリムのうちの14名が銃殺され、17名が行方不明になるという不可解な事件（いわゆる「ジャビダー事件」）が1968年３月に暴露されました。この事件はフィリピン南部のムスリムを激怒させ、それが引き金となって同年５月にムスリム独立運動（MIM、後に「ミンダナオ独立運動」に改称）が成立しました。引き続き1969年に、タウスッグ族の元フィリピン大学教官ヌル＝ミスアリを議長とするモロ民族解放戦線（MNLF）とその武装部隊のモロ人民軍（BMA）が組織されました。

ジャビダー事件は当然マニラのムスリム住民にも衝撃を与え、マルコス政権への抵抗を示すための市街デモが繰り返されました。この流れに乗って、イマム＝クシンは嘆願書を大統領府に提出したところ、いずれムスリム・ヴィレッジの土地を民間に払い下げる考えがあるという返答がありました。

ミンダナオ島では、ムスリムの分離運動と武装部隊について知らされたクリスチャン・フィリピノは極度の恐怖感に襲われました。「マジック・セブン」として知られていたコタバトの政治家グループは、1970年９月にイラガ（「ネズミ団」）と称する反ムスリムの武装集団を結成しました。イラガは、残虐極まりないやり方でムスリム住民に先手攻撃を加え、彼らを恐怖に陥し入れました。1971年にコタバトとラナオでイラガ、国家警察軍、政府軍によるムスリムの大量虐殺がおこなわれ、それがミンダナオ内戦の直接的原因となったのです。その後もムスリム集落での殺傷、暴行、略奪、放火事件が相次ぎ、それに対するムスリム側の武装集団による報復が繰り返されました。

1972年９月21日の戒厳令布告の一カ月後にイスラム指導者の率いるイクラス（「瓶詰め香水団」）がマラウィ市のミンダナオ国立大学を占拠し、大学の放送局を通じて、フィリピン政府に対するジハッド（聖戦）をムスリム住民に訴えました。ここで初めてMNLF（モロ民族解

放戦線）が登場し、ラナオ湖周辺は内戦状態に突入したのです。戦闘の波は、72年末にラナオ、コタバト一帯からスルー地域にまで及び、戦火を避けるために故郷を離れざるを得なくなったムスリム難民が激増しました。主にスルー地域のムスリムの多くが東マレーシアのサバ州に流出し、その人口は10万～20万人と推定されています。そして、ミンダナオ島のムスリムはマニラ首都圏になだれ込んできたのです。

戒除令発動より３カ月後に、ムスリム・ヴィレッジの位置する土地がムスリムに払い下げられるという内容の大統領令が発表され、このヴィレッジの住民は歓喜しました。当時、ムスリム・ヴィレッジには100家族余りのムスリムが暮らしており、彼らはそこをさらに拡大、発展させる希望を抱いていたのです。ところが、現実は思わぬ方向に向いてしまいました。マルコス大統領によって、コミュニティの名称が「マハルリカ・ヴィレッジ」（Maharlika Village）に改められ、家屋、モスク、畑など、墓地以外の施設は全てとり壊されるという決定がなされたのでした。政府の関係機関によって、電気・上下水道システムが設置され、壮麗なモスクを中心に会議場、小学校、診療所、レジャー施設、学生寮、家屋が建築されました。ところが、一定の年収以下の家族は、入居できないという規定が設けられたのです。ムスリム・ヴィレッジ住民の多くはこの資格に達していませんでした。そこで彼らは、前に住んでいたダコタ、その他の地区に分散・移転を余儀なくされたのでした。

現在マハルリカ・ヴィレッジは約25,000人が住む大コミュニティとなっていますが、マルコス政権下における政府機関のムスリムの役人と裕福なムスリムのビジネスマンの家族がその半数以上を占めています。

2　バンダラインェッドの構成と変化

ところで、ムスリム・ヴィレッジがとり壊された頃、居住者の中に、近くのクリスチャンの軍人の家屋三軒を購入したムスリムがいました。９年後に、そこにバンダラインェッドというコミュニティが成立することになるのです。

1976年12月のトリポリ条約によってマルコス政権と MNLF の間に休戦協約が成立しましたが、翌年両者は決裂し、フィリピン南部は再び戦火に見舞われます。70年代後半になるとサバへの不法渡航者にたいする取り締りが厳しくなり、スルー地域のムスリム難民は国内移住を余儀なくされました。経済的余裕のあるムスリムはマハルリカ・ヴィレッジに入居できましたが、それ以外のムスリムはマニラ各地に居住地を求めました。わずか1.6ヘクタールのイスラミック・センターは、２万人もの居住者を抱え、にわかに人口飽和状態となってしまいました。そこで、1979年に当時のイスラミック・センターのリーダーの一人が中心となって、マハルリカ・ヴィレッジ近辺の軍用地での家屋建築許可を求める嘆願書をフォート・ボニファシオ当局に提出したところ、粗造の家屋であれば480軒まで建築を認可するという返答がありました。

1980年に21ヘクタールの土地に家屋の建築が開始され、人々はそこを「バンダラインェッド」（Bandara–inged）と名付けました。政府の援助は皆無で、全て居住予定者の出費によってコミュニティづくりが実施されました。上下水道を設備する余裕はありませんでしたが、翌年、簡素な造りのモスクとマドラサが建設されました。現在バンダラインェッドは、5,000名余りの人々が住むコミュニティとなっています。バンダラインェッドの住環境に関して、人々は「マニラの中心部とは違って治安の悪さに悩まされることがなく、しかも、子どもたちは寝てい

てもモスクのスピーカーから流れてくるコラーンの読誦を聞けるところがよい」と評価しています。

バンダラインェッドの住民の大半はマラナオ族です。モスクを中心に構成されるマラナオ族の伝統的コミュニティは「アガマ」(Agama) と呼ばれ、その住民は基本的に親族関係で結ばれています。バンダラインェッドは伝統的なアガマよりはるかに規模が大きく、家族の大半が親族関係にありません。そこで、コミュニティの結束を強化するための装置として、宗教、教育、商業、法、政治の分野にかかわる組織がいくつかつくられています。

1985年12月に，イマム＝アブドゥル＝マジッド＝アンサノという人物が南ラナオ州よりバンダラインェッドに赴任し、モスクの管理者となって「イスラム教徒財団」(Al-abraar Islamic Foundation) を組織しました。彼はリビアで哲学修士号を取得した学者で、社会改革党 (Social Reformist Party) の組織者として知られていました。それはイスラム指導者から成る反マルコスの政治団体で、ムスリム種族間の桔抗を克服し、全フィリピン・ムスリムの統一を可能にさせるものはイスラム以外にない、という原理主義的な立場をとります。イスラム教徒財団は、住民のイスラム化 (＝イスラム信仰の強化) を通じてコミュニティの成員の団結をはかることを主な目的としています。

マニラのムスリム・コミュニティの中でバンダラインェッドにしか見られない組織に「カリッファ」(kalifa) があります。カリッファとは「サルタネート (スルタンの領土) の閣僚である」という説明がなされます。それは、スルタンを先頭に、計８名から成ります。マラナオ族のカリッファは本来特定のタイトル保有者によって構成されますが、バンダラインェッドには正式のタイトル保有者はいません。そこではカリッファのメンバーは全て選挙を通じて選出されます。バンダラインェッドの全住民がカリッファを頂点とするサルタネートに属します。カリッファの最も重要な役割は住民の間で生じた紛争 (もめごと) の平和的解決にあります。さらにこの組織は、バンダラインェッドの指導部としての役割を有しており、治安、政治、経済、宗教、教育など住民の全生活面にわたる諸問題を討議します。

後にカリッファは、イスラム教徒財団の創設とその直後の大統領選挙戦を通じて政治色を非常に強く帯びてきました。1986年１月にマルコス対アキノの選挙戦が後半の段階にはいりましたが、カリッファは、ハッジ・アンサノの影響の下で、アキノ支持を決定しました。カリッファおよびイスラム教徒財団の指導により、バンダラインェッドの全住民がアキノ夫人を支持し、彼らは、マニラ全域のムスリム住民の間で選挙運動に邁進しました。そして、圧倒的多数のムスリムの賛同を得たのです。

マルコス体制においては、政府の経済的援助はマハルリカ・ヴィレッジにのみ与えられ、バンダラインェッドは無視されてきました。しかし、２月の政変を契機に、住民はアキノ政権からの援助 (例えば、上下水道の設備、モスク・マドラサの拡充等) を期待できるようになったのです。

しかし、その頃アキノ政権はさまざまな問題を抱えており、その存続さえ危ぶまれていました。ところが、アキノ大統領は、86年９月５日にホロ島でMNLFのミスアリ議長との会見に成功しました。この会談の成功は、いうまでもなく、アキノ政権が樹立化へと大きく前進したことを意味したのです。そこでバンダラインェッドの住民は、自分たちの期待が単なる夢ではないという確信を持つようになったのです。

さらに注目すべき点は、86年２月の選挙戦以前はバンダラインェッド内に活動が限定され

ていたカリッファが選挙運動を通じて一躍マニラ全域のムスリムの中心的存在となったという事実です。政変後、バンダラインェッドの住民の間に、「たとえ種族が異なっていても、アキノ大統領を支持したマニラのムスリムは全てこのサルタネートに属する」という意識が芽生えてきました。その背景にハッジ＝アンサノに代表されるイスラム原理主義者のムスリム統一運動の影響があることは疑いありませんが、大統領選挙戦と政変という混乱時を通じてマニラ首都圏のムスリムは統合へのストラテジーを持ち始めたといえます。

1970年代のムスリム移住民はミンダナオ・スルー内戦による難民で、その背景には、アメリカ統治期以来のミンダナオ・スルー開拓移民政策があることを強調してきました。70年代にサバ州に流出したムスリム難民発生の事情を、鶴見良行氏は「国内移民（他島からミンダナオへという開拓移民＝難民）が新たな難民を生むという“玉突き現象”」としてとらえていますが、その分析視点は同時期にマニラに流入したムスリムにも当てはまります。

3　ディスカッション

ミンダナオ入植計画が70年代のミンダナオ・スルー内戦をもたらした歴史的背景ですが、前に示したように、内戦の直接の原因は反ムスリムの武装集団イラガの残虐行為でした。それでは、この武装集団はどのようなムスリム観を持っていたのでしょうか。エリセオ＝メルカド氏はイラガによるムスリム史理解を、イラガのメンバーの発言を引用して、次のように紹介しています。

「フィリピンのムスリムが貧しく、遅れているのは、彼らの誤った宗教とイデオロギーであるイスラムのせいだ。…ムスリムはスペイン人がやってきてミンダナオ島に十字架を立てることに抵抗した。もし彼らがそのような過ちを犯していなかったならば、国全体が平和的に、そして進歩的にまとまっていただろう。貧困と無知と暗黒をもたらしてきたイスラム教にしがみつくことによってモロ族が犯した嘆かわしい歴史的過ちを、我々は見過ごすわけにはいかない。」

このムスリム観は、いうまでもなく、フィリピン諸島民のスペイン化＝キリスト教化政策をとったスペイン当局のイデオロギー、およびムスリムを本国のインディアンに匹敵させて開拓・同化政策をとったアメリカ当局のイデオロギーと重なります。そこには、キリスト教徒のムスリムに対する蔑視が横たわっています。フィリピン・ムスリムの歴史家アルナン＝グラン氏は、ムスリム独立運動成立直後の論文の中で、次のような発言をしています。

「我々の兄弟たるクリスチャン諸君は、ムスリムと共通の対話を可能にさせるために、三世紀もの間、いったい何をしてきたというのか？　キリスト教徒の道徳の力、すなわちムスリム・フィリピノがクリスチャンと同じ国民だという実感をムスリムに持たせるはずの愛と良心の力はどこにあるのか？　キリスト教は人々を改宗させるときにのみ善きものであって、キリストの愛はキリスト教徒以外の人間には及ばないのか？　」

グラン氏の発言は、ムスリム問題の真髄を突いているように思えます。ムスリムとクリスチャンとの間に「対話」なくしてはムスリム問題解決への道はありえません。ここでいう「対話」とは、個人間における対話と同様に、一定の歴史的背景のもとで成立し、それは自分が背負っている“過去”の“重み”を率直に受けとめるところから始まるものです。ムスリム問題の真髄にあるものは、クリスチャン・フィリピノが信仰するキリスト教の表現を用いるならば、「罪-贖罪-許し（-愛）」という精神過程の原理に他ならないのです。いうまでもなく、

国家（政府）によるムスリム政策は別の次元でなされますが、そのストラテジーの中にこの原理が埋め込まれていなければ、いかなる政策も一時しのぎの対策と化してしまいます。

1986年の新憲法の中で「ムスリムの住むミンダナオ」(Muslim Mindanao) に「自治区」(autonomous regions) を設けると明記されていますが、現在、いくつもの難問が控えています。第一に、「ムスリムの住むミンダナオ」といってもそこには多数のクリスチャンが居住しており、第二に、アキノ政権はMNLFの代表としてミスアリ議長との交渉を試みましたが、MNLF内部でのリーダシップをめぐる不統一と主として異種族間の桔抗による内部分裂が見られます。さらに、ムスリム内部に「自治」に対する認識の不一致が見られます。その意味でも、イスラム指導者によるフィリピン・ムスリム統一運動とイスラム諸国の今後の動向が注目されます。

これまで、マニラ首都圏のムスリム・コミュニティは、ムスリム難民の受け皿という構図の中に置かれてきました。それらのコミュニティは、今後フィリピン南部の内戦が再び激化するような事態が発生するならば、これまでと同一の構図の中に留まらざるを得なくなるといわなければなりません。

参考文献

George, T. J. S. 1980. *Revolt in Mindanao: The Rise of Islam in Philippine Politics*. Oxford: Oxford University Press.

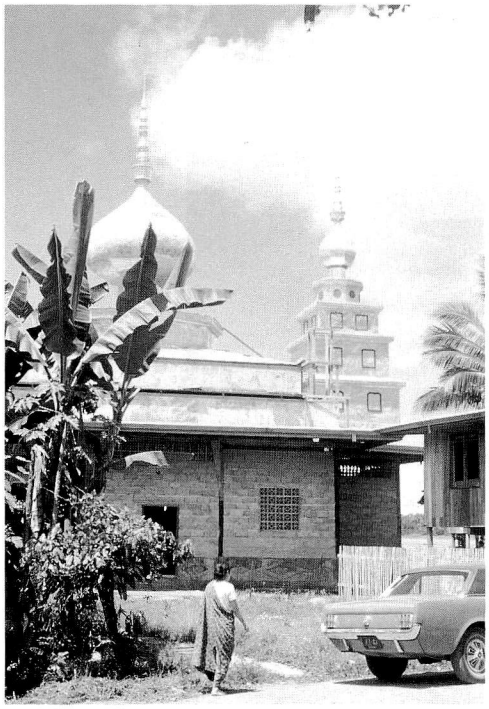
Glang, Alunan G. 1969. *Muslim Sessession or Integration?* Quezon City: R. P. Garcia Publishing Co.

Mercado, Eliseo. 1984. "Culture, Economics and Revolt in Mindanao: The Origin of the MNLF and the Politics of Moro Separatism." In Lim Joo-Jock (ed.), *Armed Separatism in Southeast Asia*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, pp. 151-175.

宗像　厳. 1986.『国際理解と文化の仲介者の役割』上智大学経済研究所.

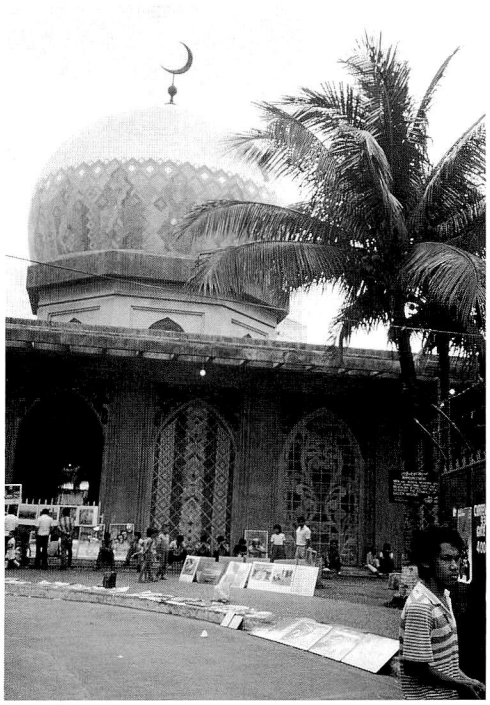
鶴見良行. 1986.「フィリピンの難民――ミンダナオ内戦を中心として――」国連大学・創価大学アジア研究所共編『難民の学際的研究――アジアにおける歴史的背景の分析とその対策』御茶の水書房、63-93頁.

[写真１]



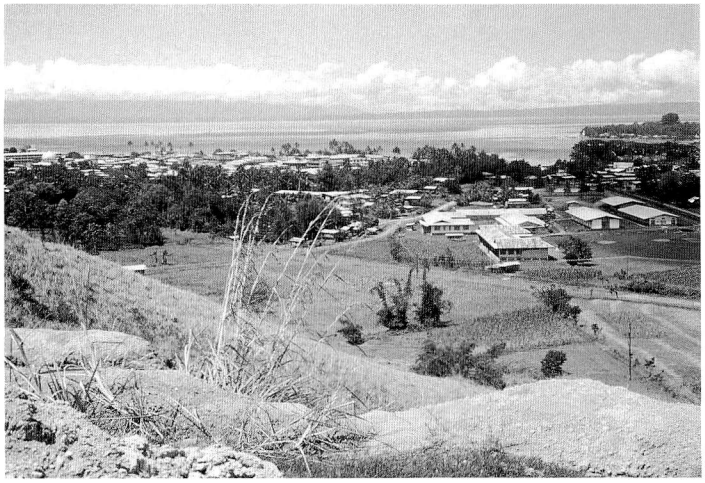
ミンダナオ島マラウィ市内のモスク。マラウィ市が位置するラナオ湖の周辺にマラナオ族が住む（1972年５月撮影）。

[写真２]



マニラ首都圏キアッポのゴールデン・モスク。イスラミック・センターより徒歩で数分のところ。金曜日にはイスラム教徒が礼拝に訪れる（1986年９月撮影）。

[写真３]



ミンダナオ国立大学のキャンパスから眺めたマラウィ市とラナオ湖。1972年５月撮影。その５カ月後にラナオ湖周辺は戦場と化した。

［写真４］

マハルリカ・ヴィレッジの豪華なモスク。かつてここにイマム＝クシンの努力で誕生したムスリム・ヴィレッジがあった（1986年９月撮影）。

［写真５］

マハルリカ・ヴィレッジの中級住宅。居住者の多くは政府の役人。この近くに裕福なビジネスマンが住む鉄筋コンクリート製の家屋が並ぶ（1986年９月撮影）。

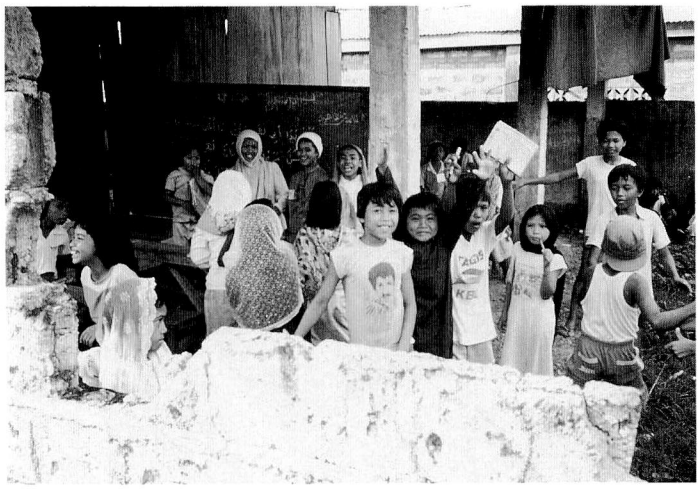
[写真 6]

マハルリカ・ヴィレッジの墓地。このヴィレッジの建設によりムスリム・ヴィレッジの住居、モスク等はすべてとり壊されたが、今日、墓地だけがそのまま残っており、ルソン島各地のムスリムの死者はここに埋葬される（1986年 9 月撮影）。

[写真 7]

モスクおよびマドラサとして使用されるバンダラインシェッドの質素な建物。礼拝の時間になると、スピーカーからコラーンの読誦が流れる（1986年 9 月撮影）。

[写真８]



バンダラインェッドの子供達は近くのクリスチャンの学校に通っているが、土・日曜日は建築末完成のマドラサでアラビア語とコラーンの授業を受ける（1986年９月撮影）。